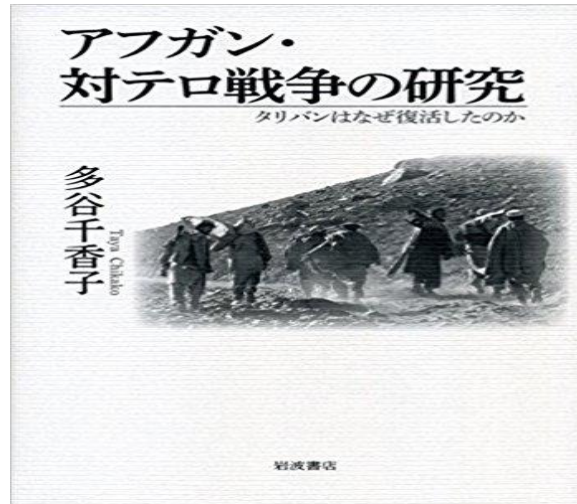


2016 年度受賞研究の概要

受賞対象

「アフガン・対テロ戦争の研究」 タリバンはなぜ復活したのか 岩波書店 多谷 千香子著
櫻田會特別功労賞



書籍の内容

本書は、アフガン・対テロ戦争について、インド・パキスタン・アフガニスタンの地政学を踏まえ、アメリカの戦略上の誤りに焦点をあてて論じたものである。アフガン・対テロ戦争は、2001 年以来今日まで続くアメリカ史上最長の戦争で、1 兆ドルを超える巨費が投じられ、アメリカをはじめとする有志連合諸国軍の兵士 3532 人(2017 年 5 月 31 日現在)が命を落とした。しかし、結果として、アフガニスタンの状況はアフガン対テロ戦争開始前よりも悪化し、タリバンは益々攻勢を強めている。また、アメリカは、アフガン・対テロ戦争の初戦で実際には大きな失敗をしたものの、表面的にはアフガンの土地からアルカイダやタリバンがいなくなったため、余裕ができたとばかりにイラク戦争に突き進み、その後イスラム国の誕生を見るなど、国際テロが世界の大問題となる状況を作り出してしまった。

何故こんなことになってしまったのだろうか？ 第一に、アメリカは、戦争を避けられたのにその機会を見逃したのである。つまり、オサマ・ビンラディンが引渡されなかったのは、オマルの発したタリバン流のシグナルをアメリカが読み解けなかったからである。また、9/11 テロ事件は準備に数年かかっており、その間、アメリカの捜査当局は事件を未然に防止する糸口を多数得ていたのに生かせなかった。第二に、仮に戦争を始めても 9/11 テロ事件の犯人＝アルカイダに的を絞って殺す作戦に出ていれば良かった。つまり、タリバンはオサマ・ビンラディンに出て行ってもらいたいと思っており匿っていたのではない。また、指導者オマルは、実のところ、9/11 テロ事件に反対していたが、アメリカは後に事実を知っただけだった。さらに、タリバン政権は、1979 年のソ連侵攻以来続いていた戦乱を終息させたため、アフガン人の殆どが、同政権を嫌っていた訳ではなく、中世的なイスラムの伝統の中ではあるが平穏な生活を享受していたのに、アメリカはアメリカ型民主主義の普遍性を信じ込み、タリバン政権を打倒すればそれが自然に根付くと誤解していたのである。